

細分課題 7

染色体異常個体の有病率と発生率に関する研究

7・1 新生児における染色体異常の発生率に関する研究

東京大学医学部

日 暮 真

ま え が き

新生児における染色体異常の発生頻度に関する研究は、いまだ本邦においては報告をみていない。そこで本研究者は年間分娩数の多い産院の協力を得て、昭和47年7月より継続して本研究を行なっている。

研 究 方 法

前年度と同じく、東京都下某産婦人科病院（年間分娩数平均2,300）にて出生した全新生児に対し、性染色質検査（X染色質ならびにY染色質）を施行し、性染色体異常児のスクリーニングを行なった。一方、常染色体異常に関するスクリーニングとして、(1)外表ならびに内臓奇形 (2)皮膚紋理 (3)精神発達遅延（乳児期における検診）等を参考に、疑わしいものについて染色体分析を行なった。

研究成果ならびに考察

性染色体異常のチェックを目的として性染色質検査を施行したものは、X染色質検査（女）1,820例、Y染色質検査（男）1,350例である。うちTurner症候群（45,X Y）1例、47,XYY 個体1例を見つけた。

一方、常染色体異常のスクリーニング対象は7,158例（男3,691・女3,467）で、この中から

47,X Y , +13	1
47,X Y , +18	1
46,X Y 47,X Y , +18	1 } 2

47, XY, +21	2	} 7
47, XY, +21	4	
46, XY / 47, XY, +21	1	
46, XY, -G, +t(Bp-; Gp+)	1	

の異常例を発見した。

性染色体異常のスクリーニングの検体処理がややおくれているために、母集団数の差異が生じている。また、身体徴候と精神発達とを手がかりにスクリーニングが行なわれているため、相互転座保因者はスクリーニングからもれる可能性があるのは、止むを得ない。

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

まえがき

新生児における染色体異常の発生頻度に関する研究は、いまだ本邦においては報告をみていない。そこで本研究者は年間分娩数の多い産院の協力を得て、昭和47年7月より継続して本研究を行なっている。